

西の湖へ放流したワタカの成長および生残状況

根本 守仁

◆背景・目的

琵琶湖固有種であるワタカは、資源が激減しており、平成14年度から種苗放流を実施している。ここでは、成長や生残状況の把握を目的に、過年度に放流した標識放流魚の追跡調査を実施した。

◆成果の内容・特徴

- ・西の湖へのワタカの種苗放流は、例年3月に体長約30～40mmの種苗を放流しており、平成14～19年度に合計1,403,000尾を放流した。これらのうち、平成14年度分を除き、年度により異なるが全数または一部にALC標識を施して放流した。
- ・平成20年11月には、西の湖内および周辺の琵琶湖へ腹鰭を切除した2および7歳魚を合計1,922尾を放流した。
- ・腹鰭切除魚の混入状況からPetersen法により平成20年11月時点での誕生日別の資源尾数を推定するとともにALC標識魚の混入率から、放流魚由来の資源尾数を推定して、放流後の生残率を推定した。生残率は、図1に示すように放流から8ヶ月後では42.9%、20ヶ月後では11.2%、32ヶ月後では0.54%、44ヶ月後では0.11%、56ヶ月後では0.17%と推定された。
- ・成長について、今回の調査は11～12月に実施したが、そのときの誕生日別の平均体長を図2に示した。2007年生まれの平均体長は144.2mm、2006年生まれでは204.7mm、2005年生まれでは223.3mm、2004年生まれでは242.8mm、2003年生まれでは262.6mmであった。

◆成果の活用・留意点

さらにデータを蓄積していくことにより、計画的な種苗放流を実施するためのデータとして活用できることが期待される。

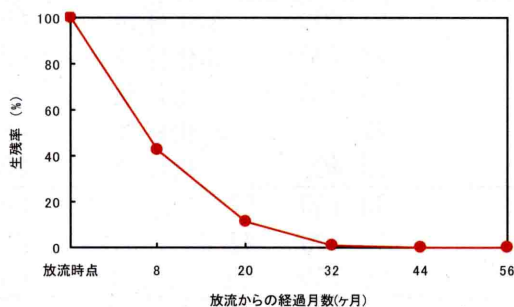


図1 ワタカの放流後の生残状況

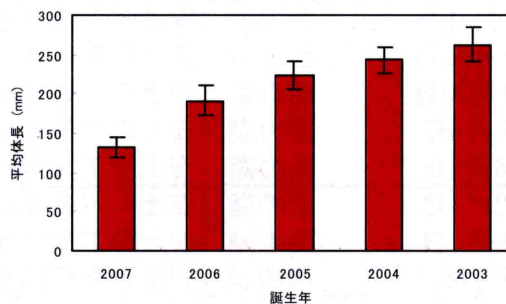


図2 再捕されたワタカの誕生日別の平均体長

※ 本報告は、水産庁による平成20年度湖沼の漁場改善技術開発委託事業の成果の一部である。